綴葉 ていよう

'21 7

No.399

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

岩渕功一編著『多様性との対話 ダイバーシティ推進が見えなくするもの』

ベッティーナ・シュタングネト著、香月恵里訳『エルサレム〈以前〉のアイヒマン 大量殺戮者の平穏な生活』

特集／受賞作

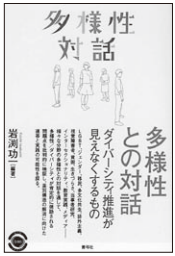
新刊コーナー／新書コーナー／読書への誘い／私の本棚

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階
Tel：771-6211 ／ E-mail：teiyo@s-coop.net
綴葉HP：http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

「多様性のある社会」ってなんだ？

多様性との対話
ダイバーシティ推進が見えなくするもの
岩渕功一編著　青弓社



「多様性」も「ダイバーシティ」も、もう今では誰もが日常的に耳にする言葉だろう。これらを奨励する動きに対し、何となく懐疑的になってしまうのは評者だけだろうか。良いところだけが押し出されていて、これで本当に、世の中で複雑に絡み合っている様々な問題は解決されるのかと不審に思う。

多様性やダイバーシティーを目指すことが前提の言説が多い中で、問題に一歩踏み込んでいるのが本書である。一二名の研究者・実践者による共著であり、それぞれの視点から多様性が論じられている。

市場化される社会運動

そもそもダイバーシティが経営学の考え方に由来していることは、どれくらいの人が知っているだろう。「差異を積極的に肯定しお互い認め合おう」という部分が強調されがちだが、その根底には「多様な人材活用が社会を活性化させる」というマネジメントの視点や、そこから発展した、差異を商品化する発想があると、著者の一人である新ヶ江は言う。

こうしたダイバーシティ推進の動きには、良い側面もある。例えばLGBTの社会運動は、電通の「LGBTマーケティング」無しには拡大しなかった。「同性パートナーシップ制度」報道の際のメディア表彰や、写真家レスリー・キーによる写真展等、マイノリティーは大企業と手を携えることで世の中を動かすことができたのだ。

一方、LGBTマネジメントは、人権問題が商品化されてしまうといった側面もある。また「LGBTの擁護者」という多数派を形成することで世の中を動かすという戦略は、結局マジョリティとマイノリティの二項対立を生んでしまう。

「対話」だけでいいの？

ダイバーシティの話だけでも複雑だが、ジェンダー、移民、障害者、貧困層……と更に問題が展開され、読むほど視点は増えていく。

序章で、編者である岩渕は、多様性をめぐる問題が『ハッピートーク』として語られがち」であると指摘した。しかし読み進めると、軽いノリで運動に参加する「意識低い系」を巻き込むことも、社会運動という観点では重要であると分かる。また、多様性を目指す中で、差異を「受け入れやすいもの」にするのと引き換えに人をカテゴリー化してしまうという問題がある。「#トランス女性は女性です」はトランス嫌悪に対する反論だが、まとめきれない人間の実態を単純化することに疑問を感じるトランス女性の意見もある。

最終章はLGBT社会運動家、松中権のインタビューで締めくくられる。「LGBTブーム」への批判について問われると、批判の後に具体策がないと社会は変わらない、と松中は鋭くきりかえす。

複雑に絡み合った問題だからこそ、対話が必要だ。いや対話だけではダメなのか？　誰にとっても他人事ではない。ぜひ読んでいただきたい。

（茫漠）

（二四〇頁　本体一六〇〇円　3月刊）

覆る「悪の陳腐さ」

エルサレム〈以前〉のアイヒマン

大量殺戮者の平穏な生活

ベッティーナ・シュタングネト著
香月恵里訳　みすず書房

アイヒマン。ホロコーストの代名詞ともいえる者。イスラエルに拉致され、法廷で「私もまた、一人の犠牲者なのです」と言ってみせた者。ハンナ・アーレントはそこに「悪の陳腐さ」を見てとり、かの有名な『エルサレムのアイヒマン』を著した。しかし、それは本当に「陳腐」だったのか？　戦後アルゼンチンへと亡命したアイヒマンはイスラエルに捕らえられるまでの間、膨大な言説を残していた。本書はこれまで顧みられることの少なかったそれらの資料から改めてアイヒマンの実像に迫ろうとするものである。

【平穏な生活】

戦争中ナチス幹部という地位にあったアイヒマン。彼はしかし戦況の窮迫する中で姿をくらます手筈を極秘裏に整えていた。偽造した名前と身分、そして潜伏生活。アルゼンチンに向かう前に彼がドイツ国内でも長期間暮らしていたことが本書で明らかにされる。静かな田舎で農林業に携わる気のいい隣人として彼は穏やかな暮らしを送ったらしい。不思議なことだが、その彼がアイヒマンだと気づかれることはなかったようである。やがてドイツを巡る情勢を見ながらアルゼンチンへ。ペロン大統領の治下でナチス関係者の亡命を受け入れていた同国は「国民社会主義」者の溜まり場となり、アイヒマンは家族も呼び寄せてその地で生活を営むようになった、もちろん元ナチス幹部、そして今は国民社会主義宣教の中心人物として敬意を払われて。ホロコーストの責任者は、問責を逃れて悠々自適の生活を送っていたのだ。

【悪の実像】

『エルサレムのアイヒマン』で指摘されるアイヒマンの像とは全体主義的体制に順応し自ら思考を放棄した中間管理職、遵法精神に溢れた普通の市民というものだ。だが前述のように、平穏な暮らしを営むアルゼンチン時代のアイヒマンは亡命仲間と共にかの思想を喧伝していた、ナチス体制下にいないにも関わらず、積極的に。そこに「陳腐さ」はあるのか。本書から読み取れるアイヒマンの姿は、自らを都合よく描くことに長けた人物というものだ。ナチス幹部時代、彼は自らを親衛隊トップのヒムラーに直接会える人物として演出し、重要人物であるようにアピールした。亡命時には自ら筆を取り、インタビューに答え、本を読み、戦時中の回顧を記録に留めようとしていた。ただしそれについて著者は、「アイヒマンが探求したのは真実ではなく、万一の場合に備えたできるだけもっともらしい正当化であった」と看破する。アーレントも彼については「ほら吹き」と手厳しく評価を下している。ただ、彼女の見た全てが「ほら」だった可能性がある。誇大が意図的な嘘なら、卑小を意図して嘘をつくこともまた容易である。相手に応じて見せる姿を変える、鏡のように。その虚像を作り出すアイヒマンの「まこと」がどこにあるのか、本書を読めば見えてくるかもしれない。　（ねこ）

（六八八頁　本体六二〇〇円　5月刊）

サリー・ジョーンズの伝説
あるゴリラの数奇な運命

ヤコブ・ヴェゲリウス作
オスターグレン晴子訳　福音館書店

本書は、アウグスト賞児童書・YA 部門を 2020 年に受賞した作品である。この賞は、作者のヤコブ・ウェゲリウスの出身地、スウェーデンの賞で、国内で出版された最も素晴らしい作品に贈られる出版社協会主催の賞である。50 年以上の歴史を持つ賞を受賞したこの作品は、老若男女問わず多くの人の心を魅了する。

物語に最初に登場するのは、アフリカの密林に生息する野生のゴリラたち。忍び寄る密猟者によって、ゴリラの赤ん坊が連れ去られてしまう。その赤ん坊こそが本書の主人公、サリー・ジョーンズである。この物語は、サリーがたくさんの人々や動物と出会い、困難を乗り越え冒険していくファンタジーである――と結んで筆をおくわけにはいかない。本書を読み終えた後に残るのは、ただの希望に満ちたメッセージではない。

このサリーという名は、ある商人が名付けたものだ。動物を連れて船に乗るにはお金がかかりすぎるという理由で、人間の赤子に成りすますために与えられた名前だ。この愛のない理由でついた名が、物語では使われ続ける。サリーは、いつの間にか故郷のことも忘れ、人間を信じるも見捨てられ、故郷を目指すも裏切られ、幾度となく喜びと苦しみを味わう。その苦労のあまりサリーは、虚無に陥り病に伏す。そんな過酷な運命に翻弄されつつも生き永らえるサリーに待っていたのは、ある一人の人との出会いだった。

サリーは世界を憂いても憎みはしない。どんなに傷ついても、また誰かを信じ抜く。傷ついた分だけ、更に相手を思いやる。独りぼっちでは生きていけない生き物の儚さが、サリーの運命を通して語られる。　（**トントゥ**）

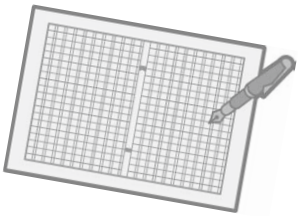
（アウグスト賞　103 頁　本体 2300 円）

特集

受賞作

無数に並んだ本を前に、僕らは何を読めばいいのか、いつも彷徨っている。表紙の綺麗さ、友人の紹介、書評の言葉。数限りないヒントの中で、それでも未だ一冊と出会えない。ならば受賞を一つの入口にしてみるのはどうだろう。安易だと嗤うかい。そうかもしれない、でもどこかの誰かを震わせたから、あの作品は花束をいただいたのかもしれない。時には凡庸さに身を任せ、審査員を超える本の魅力を語っておくれ。

（**きもの**）



菜食主義者

ハン・ガン著　きむふな訳
cuon

ある日突然、妻が菜食主義者になった――。

二月のある冷え込んだ明け方、ごく平凡な女だったはずの妻・ヨンヘは、裸足のまま、薄いパジャマ姿で、真っ暗なキッチンの冷蔵庫の前に突っ立っていた。何があったのか聞いても、彼女は「……夢を見たの」と呟くばかり。そこで夫は、妙な不気味さを感じながらも寝室に戻り、日が明けるまで横になっていた。しかし翌朝、再びキッチンに行くと、妻はまたそこに立っていた。彼女は冷蔵庫から豚肉やウナギや冷凍餃子を一つ残らず取り出し、脇目も振らず、それらをゴミ袋に放り込んでいた――こんな場面から、物語は始まる。

三つの中編からなる本書が描くのは、家族や社会から暴力を受け抑圧される女性・ヨンヘの姿だ。たとえばこんな一幕がある――ある日、ヨンヘは夫と二人で家族の集まりに出向いた。最初は和やかな雰囲気に包まれていたものの、話題がヨンヘの菜食に移ると、空気は次第に張り詰めていく。そこで声を荒げたのは、ベトナム戦争で武功勲章を受章したことを最も誇りにしている家父長的なヨンヘの父だった。彼はヨンヘを叱咤し、肉を無理やり食べさせようとする。しかしヨンヘは、それを頑なに拒む。「辛そうにもがいている妻の唇に義父は酢豚をこすりつけた。ごつい指で妻の唇をこじ開けたが、食いしばっている歯はどうすることもできなかった」。

一体なぜ彼女はここまで肉を食べることを拒否するのか？　彼女はなぜある日突然、菜食主義者になったのか？　環境保護のためでも、痩せるためでもないとしたら、一体なぜ――。本書をじっくりと読めば、その理由が朧げながら見えてくるかもしれない。（**ぱや**）

（李箱文学賞ほか　301頁　本体2200円）

両方になる

アリ・スミス著　木原善彦訳
新潮クレスト・ブックス

ちょうど一六〇ページずつ。合計二つの「第一部」が一つに、いや「両方に」なる不思議な小説だ。一五世紀イタリアの画家と二一世紀イギリスの学生。男と女、死と生。二人の時間、二人の物語が、いま目の前で結晶化する。

フランチェスコは画家だ。ルネサンス時代の絵描きになるため、彼女は生れ変わり男性となる。たゆまぬ努力が実を結び、画家の眼は養われた。真実と美を見抜くフランチェスコ。公爵は権力欲の塊だ。笑顔の売春婦の眼は絶望一色だ。自分ができるのはただ描くことだ。悩み苦しみ、人々は死んでいく。「なんてね。」そんな単調な筋書きを欺くかの如く画家とその愛する隣人たちは、権力者の秩序を逃れ、真の愛、美の快楽に身を任せ生きていた。死後のフランチェスコの視点で見返されるその生は、強く柔らかな魅力で読者を惑乱する。同時に死者は見つめている。ある少女の物語、もう一つの第一部を。

ジョージは少年だが少女だ。ケンブリッジの学校に通いiPadを使いこなす彼女は、母の死を受け入れられずにいた。母との思い出を現実と混同させるジョージ。いつしかそれは妄想に変わる。以前母が語ってくれた女。彼女は母を監視するスパイで、母は陰謀に巻き込まれたのではないか。理屈っぽい父と幼い弟は聞く耳を持たないけれど。友達のヘレナはジョージの執着に付き合ってくれた。二人は授業課題の一環として、母の好きだった絵を調査し始める。手紙一枚だけで存在が確認された、フランチェスコという画家の絵を。

スコットランド生れの著者スミスは、本書で数々の文学賞に輝いた。ただ、賞の枠の中では、この怪作は語れそうにない。　（**とよ**）

（ゴールドスミス賞ほか　334頁　本体2400円）

ZERO to ONE
君はゼロから何を生み出せるか
ピーター・ティール、ブレイク・マスターズ著
瀧本哲史序文　関美和訳　NHK出版

日々研究に勤しむ諸君、君はゼロから何かを生み出しているか？　ハッキリ言おう。1をnにする作業に価値はない。今後の世界では、ゼロを1にすることにこそが価値になる――これこそが本書の主張だ。

1998年にPayPalを共同創業して会長兼CEOに就任。2002年には15億円でeBayに売却。Facebook初の外部投資家となったほか、複数のスタートアップにも投資している……そんなシリコンバレーの寵児、ピーター・ティールは、いかにして「ピーター・ティール」となったのか。彼曰く「ZERO to ONE」、すなわち新しい何かを生み出そうというマインドが成功を支えてきたとのことだ。

彼はこの世界を「水平的進歩（グローバリゼーション）」と「垂直的進歩（テクノロジー）」の二軸で捉える。従来の世界では、グローバリゼーションこそが世界を発展させる鍵だと考えられてきた、とティールは考察する。しかし、グローバリゼーションは旧来の成功モデルを模倣・再現する行為だ。故にその成長もまた既存の成功モデルの域を出ない。だからこそ、ブレイクスルーを生むには、テクノロジーによる「ZERO to ONE」が必要なのだ――。これがティールの考えだ。

この前提を踏まえ、いかにゼロから何かを生み出すかについて、著者の実体験を踏まえて本書には詳細に記されている。本書は手っ取り早い「起業の虎の巻き」「発想力アップの教科書」などではない。骨のある本だが、だからこそビジネスパーソンのみならず、アカデミアの諸生にも得るものがあるだろう。さあ、頁を開き、ゼロを1に進めよう。

（出席点）

（ビジネス書大賞　256頁　本体1600円）

断片的なものの社会学
岸政彦著
朝日出版社

意味のない出来事。見知らぬ人のブログ更新、遠くのエレベーターに乗る人が偶然見えること、「怪我人」と「毛ガニ」の聞き間違え。とある夫婦が旅行に出かけたこと、道中で事故に遭い死亡したこと、その夫婦を私たちは知らないということ。この世界には、文脈を持たない出来事の欠片がごろごろと転がっている。

著者は小さい頃、道端に落ちている石を適当に拾い上げ、じっと眺める癖があったという。手に取った瞬間、大勢に紛れていた石は固有の形や色を持った「この石」となる。しかし世界でたった一つの「この石」は、そこらじゅうに意味を持たずに転がっている。幼い著者はそのことの厖大さを捉えようと必死になっていたそうだ。

社会学者となった著者は、むしろ出来事を分析したり解釈したりすることを仕事としている。だが、調査を行う中で「全体化も一般化もできないような」誰かのストーリーに惹かれることがあるという。

本書では、著者が日常で体験した一瞬一瞬が、断片的なまま綴られている。その出来事に感動したとか、何故それが印象に残ったかとか、その事柄を意味づけしてしまうようなことは一切書かれていない。

かつて、小石を拾い上げ途方もなさを掴もうとしていた少年が大人になり、今度は実社会で、ふとした瞬間を手にとっては無意味さを確認している。会った事もない著者の夢中な背中が目に浮かぶ。石っころを拾っては眺め、そっと戻すその作業を追体験するのは、不思議と居心地が良い。石の数の多さに足を竦ませながらも、その当たり前に身を任せたくなる。

（茫漠）

（紀伊国屋じんぶん大賞　244頁　本体1560円）

心という難問
空間・身体・意味
野矢茂樹著　講談社

「心」なるものをめぐって思索に耽るとき、改めてそれは私たちに「難問」を突きつける。日常生活の中で見聞きするあれやこれ――それは今目の前の本一冊とっても然り――は、実は意識に映じた実物の「影」にすぎないのだろうか？　知覚の外側にある実物と知覚イメージを対置する「意識と実在の二元論」を越え「意識の一元論」、すなわち〈世界のすべては私たちが見聞きする知覚イメージである〉という立場を採ったとき、私以外の人間の意識はさらに捉えがたいものとなる。一体私と同じく意識をもつはずの他者の「痛み」は、どう理解されるべきだと言うのだろう？

著者の野矢はここで、〈知覚イメージや実物の像などでない「世界そのもの」を私たちは知覚している〉とする「素朴実在論」を擁護する。問題の出現に立ちつくした第Ⅰ部につづき、本書第Ⅱ部からはいよいよ本格的な議論がスタートする。知覚された見え姿が様々であるとはいえ、世界のあり方は、対象が空間に占める位置・私の身体状態・対象が帯びてくる意味という三つの要因（の関数）で決まる。――「眺望論」および「相貌論」として彼がまとめあげる二つの理論を駆使し、第Ⅲ部に「難問」への解答を試みる。

本書が難解な哲学理論にすがりつくことはない。展開される議論は、どこかの哲学書の受け売りでなく、たとえば〈目の前にある赤いリンゴ〉といった身近な例に始まる。本文全体を貫くのは、そんな日常の実感から問題の所在を明らかにし、自分で規定した言葉を操って哲学する、著者の勇姿である。その見事な様は、これぞ哲学のあるべき姿と讃えて、決して過言ではないことだろう。　（**八雲**）

（和辻哲郎文化賞　394頁　本体2400円）

「ボランティア」の誕生と終焉
〈贈与のパラドックス〉の知識社会学
仁平典宏著　名古屋大学出版会

「ボランティアが不足しています。」「医師や看護師にボランティアを要請しました。」

五輪の祭典が近付くにつれて、ボランティアという言葉がニュースに並ぶ。他人や社会のためという積極的な意味が付与されながらも、どこか行政の下請けとして利用されているようにも思えてしまう。ならばここで一度「ボランティア」という言葉を徹底的に考えてみてはいかがだろうか。

本書では、明治から2000年代までの「ボランティア」とそれに関連する言説の変遷を記述する。そこでキーとなるのが《贈与のパラドックス》だ。「贈与」をする行為者は常に「実は見返りを求めているのではないか」という「交換」の眼差しを受ける。ボランティアも例外ではなく、「本当に利他的なのか」「偽善なのではないか」という批判に晒されてきた。ボランティアをめぐる言説において、どのようにして《贈与のパラドックス》を解消するかが時代時代の課題であった。

大正期における「社会」の発明、昭和期における「滅私奉公」への動員。自発性を伴うボランティアは利他主義、社会貢献、自己成長など多くの文脈で語られていく。著者は近年のボランティアは、ネオリベラリズムと共振し、福祉削減の政策に動員されていくことを記述する。

ボランティアは勿論、善意を伴う行為にシニカルな視点を持ってしまう読者は多いだろう。何故欺瞞を感じるのか、何故「無知」と馬鹿にしたくなるのか。そしてこうした批判に耐えれる贈与の営みはどこにあるのか。是非一読してほしい。　（**きもの**）

（損保ジャパン記念財団賞　562頁　本体6600円）

新刊コーナー

取材・執筆・推敲
書く人の教科書

古賀史健著
ダイヤモンド社

文章に慣れ親しんできた人なら一度は、「書くこと」を職業にしたいと思ったことがあるだろう。学者や小説家など多くの書き手がいるなかで、この時代最も身近なのは「ライター」である。日夜スマホを眺めているあなたも、知らず知らずのうちにライターの文章を読んでいる。

しかし、ライターとは何ができる人のことだろうか。優れたライターとは他の書き手と何が違うのだろうか。今まで言語化されてこなかったライターの資質を、精緻に記述したのが本書である。『嫌われる勇気』で有名な古賀史健が構想から三年をかけて出来上がった本書には、まさに「書く人の教科書」という言葉に相応しい内容が詰まっている。

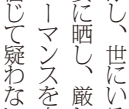
「取材・執筆・推敲」と分けられた構成には文章を書く上で重要なことが段階的にまとめられている。しかし本書の魅力はそうしたマニュアル的な文章の中に入る格言である。《文章の書き方を学ぶことは、ひとえに翻訳の仕方を学ぶことだ》《わかりにくい文章とは、書き手自身が「わかっていない」文章なのだ》《やる気があるから面白い原稿が書けるのではなく「面白い原稿にならないから、やる気を失っている」のだ》。思わずメモを取りたい言葉が並ぶ。そして書き手としての自分が改められていく。

文章を仕事にしたい人は勿論、今書きあぐねている人にも学べることは多いはずだ。是非一冊家の本棚に入れておこう。（きもの）

（四八〇頁　本体三〇〇〇円　4月刊）

恐れのない組織
「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす

エイミー・C・エドモンドソン著
野津智子訳　村瀬俊朗解説　英治出版



「心理的安全性」とは何か。心理学系の研究室を卒業し、来春から組織コンサルタントとして働く評者は、組織学を勉強する中で、改めてこの概念に出くわした。そして、漠然と理解した気になっていたこの概念の重要性に、改めて気付かされることになったのだ。

著者は、学生時代の研究の中で、有能な医療チームほど、医療ミスをしているという予想を裏切るデータに辿り着き、有能なチームは決してミスが多いのではなく、ミスを報告する数が多いのではないかという予測を立てた。結果的にこの出来事は、著者が初めて「心理的安全性」に着目する契機となった。

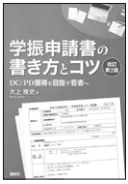
「心理的安全性」は、結果を出さなくて良いというような安心のことではない。対人関係の不安を減らしていくことで、アイデアや疑問、懸念を素直に話すことができるからこそ、組織としてのパフォーマンスが増していく。その流れを踏まえれば、あくまで業績を追い求める上で最重要の要素であるということが理解できる。さらに著者は、「心理的安全性」が低いことによって生まれる沈黙文化が、従業員にとって、時に身体的安全さえも脅かす危険なものになることを指摘する。

しかし、世にいる多くの経営者は、従業員を不安に晒し、厳しく追い立てることこそが、パフォーマンスを上げていく秘訣なのだと、そう信じて疑わない。だからこそ、統計データに立脚し、従業員の働く心を支える新しいリアリズムこそが、必要とされているのではないだろうか。（ましゅ）

（三二〇頁　本体二二〇〇円　2月刊）

学振申請書の書き方とコツ 改訂第2版
DC／PD獲得を目指す若者へ
大上雅史著　講談社

博士課程で研究に専念したい。でもお金がない！　そんなあなたは一刻も早く本書を手に取り、「学振」の申請書を書き始めよう。



日本学術振興会特別研究員、通称「学振」とは、研究に専念することを希望する大学院博士課程在学者及び大学院博士課程修了者等を「特別研究員」に採用し、研究奨励金を支給する制度である。毎年六月に申請期日が設けられ、採用されれば毎月二〇万円の生活費（DC1・DC2）と研究費が給付される。しかし採用されるのは京大の院生であっても25％前後。この狭き門を突破するためには、誰が読んでも分かりやすく、独創的であると感じられる申請書を書かなければならない。

本書はその具体的な方策を丁寧に教えてくれる。本書の第三章と第四章を読み、申請書の設問で問われている要素を整理して一つの研究計画にまとめる方法や、可読性の高いフォントや図の使用法を学び、申請書の第一校を完成させよう。第一校もなかなか書けないのなら、「コピペ」でも良いのでとにかく一度完成させろと著者は言う。本書の文末にある様々な分野の学振採用者の申請書や、自分の周りの採用者の申請書を参考にし、ひとまず申請書を書き上げてみると良いだろう。

あとは様々な分野の教員や院生に申請書を読んでもらい、修正を繰り返すしかない。コメントを貰える人を探すだけでも一苦労かもしれないが、その過程で得られる力は、一人で本や論文を読むだけでは決して得られない大切なものを数多く含んでいる。　（石透）

（二〇八頁　本体二五〇〇円　3月刊）

友人の社会史
石田光規著
晃洋書房

あなたにとって、親友とはどんな存在だろうか？　この問いに対する答えは人によってそれぞれだろう。しかし、その答えは時代性を帯びて現れる。地域や家族などの中間集団の衰退による個人化、常時連絡の取れる携帯端末の普及、SNSの発展など、時代ごとに友人との関係性を規定する外的要因は変化するからだ。例えば、この本によると二〇〇三年をピークに悩みごとを友だちに相談する人が減り、最新の調査では、ついに、母親に相談する人が友だちに相談する人を超えたそうだ。

本書は私たちにとって「親友」とはどのような存在だったのか？　という疑問に対して、一九八〇年代から二〇一〇年代までに集められた膨大なインタビューのデータと新聞記事に使われる「親友」という言葉を分析しながら、そこに現れる「親友」という言葉の待つ意味の時代性を考察している本である。

マクロな時代性の分析をメインとした本書ではあるが、その分析には新聞記事に投稿された一般市民の文章を利用するなどミクロな視点からの考察も多い。高校野球記事の「親友」と一般市民の「親友」のイメージの差異分析など、紹介される事例が興味深い。そして、現代人が持つ「親友」のイメージにある矛盾や複雑性が生じているという考察は我々が普段、なんとなく思っていることを言葉にしてくれる。親友とはどのようなものであるか、客観的に考える契機としてこの本をとってみてほしい。　（投稿・BBM）

（二二〇頁　本体二四〇〇円　2月刊）

まとまらない言葉を生きる

荒井裕樹著
柏書房

目の前で大切な誰かが悲しむ時、果たしてどれほどの人が彼／彼女に寄り添う言葉をかけてあげられるだろう。「頑張れ」、「大丈夫」、「次に期待してる」……これらは茫漠たる現代砂漠ではクリシェと化し、時に人を傷つける刃にもなる。「共生」を謳いながら、人に寄り添う「言葉」に餓える私たち。そんな私たちが心丈夫に生きるために、本書は「言葉」を見つけるヒントを与えてくれる。

著者の荒井はこれまで、ハンセン病者や障害者の文学を研究してきた。アカデミックな体裁の好著を数々残してきた彼だが、今回はそれらとは大きく異なる。というのも本書は、彼がこれまで出会ってきた忘れ得ぬ「言葉」を巡るエッセイ集なのだ。然しエッセイ集と言えど、その根底には一貫して、著者の「言葉」に対する強く熱い信頼が滾っている。

本書所収の一篇「励ますことを諦めない」を紹介しよう。病への差別が激しかった戦後。ある患者が、永訣した患者仲間へ送った詩を引きながら荒井は述べる。詩を読んだとて死者は帰ってこない、差別も消えない。けれど誠心誠意を尽くされた言葉によって「いつか、誰かが、彼のことを思い、彼のために祈ってくれるのかもしれない」。荒井はこれこそ「言葉を信じる」ことだと力説する。困難の中でも、誰かに寄り添うことを決して放棄しない一人の人間の営為がここには刻まれている。

「言葉」は容易に捉え難い。だが時に「まとまら」ずとも、直向に「言葉」と向き合う、その貴さを本書は教えてくれる。（リンダ）

（二五六頁　本体一八〇〇円　5月刊）

みんな水の中

「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか

横道誠著　医学書院

常に夢見心地で、不注意から傷を負わされ五感が「大氾濫」している。いわゆる発達障害者の世界は魔法に満ちた現実だと著者は言う。その内実はどのようなものだろうか。

そんな現実を追体験できる本書は、とてもユニークな読み物だ。ASDとADHDという二つの診断を受けた文学研究者。そこで彼は詩、論文、小説という三つの方法を通じ、自身の過去と現在を解剖し記録する。揺らめき漂う宇宙世界の遊泳者。そんな著者の感覚が、彼の熱愛する文学の引用と溶け合い読者の心に流れ込む。ルソー、ユゴー、ジーン・リース。ムージル、カフカ、村上龍に村田沙耶香等々。そのほか文化全般との混ざり合いが、当事者研究としての本書に独自の煌めきを与えている。「ケアをひらく」シリーズの新刊である本書は、こうした膨大な参照点もあって共感の波を広げているのだろう。

「私はもっと自由でいたい」。視線を合わせる事の苦しさを説明する場面で、著者の横道はこう語る。〈目を見て話そう〉といった社会規範に彼と彼の仲間たちは絶えず苦痛を強いられてきた。加えて著者特有の記憶、体験が「地獄行きのタイムマシン」という表現と共に述べられ、一つの人生の深刻な事実が見えてくる。その全てに言葉を与えた彼の決断を受け止め、その言葉に向き合ってこそ、この魅惑の水中世界は微笑むのだろう。

紹介される自助グループや当事者インタビューは、そうした応答の手引きとなろう。渇いた社会に、本書は潤いを与える。（とよ）

（二七〇頁　本体二〇〇〇円　5月刊）

北欧から「生きやすい社会」を考える
赤地葉子著
新曜社

本書の副題は、「パブリックヘルスの証拠は何を語っているのか」である。著者の赤地葉子は、パブリックヘルス（公衆衛生）の専門家で、世界をまたにかけて働く。現在は、デンマーク人の夫と二人の間にできた子供と共に、フィンランドで暮らしている。

本書は、著者が得たいくつかの統計結果を用いて社会の事象を説明する。著者は、統計はただのデータを点や線からなるパターンにするという。その統計から浮かび上がる具体的な人々の生活に、著者は思いを馳せる。若い女性のＨＩＶ感染者数が多いこと、高所得が必ずしも幸福とは限らないが、貧しさは精神的な苦痛を伴うこと――このような統計によって得られた事実から、どういった施策が、より良い社会や人々の健康に貢献できるかを模索する。統計のみならず他の研究視座の紹介と共に現在の問題点にどう研究者たちが向き合っているかが理解できる。

しかし実のところ、本書はパブリックヘルスの専門書ではない。著者の好きな詩や、同僚からの一言、また北欧での生活ぶり等が、エッセイのような優しい文体で紹介されている。著者は、読者に語りかけるように北欧の社会を伝える。

最後に、評者の心に色濃く残った、著者の夫が放った一言を紹介する。「もし社会がしっかりしていれば、弱者が政府によって守られているのならば、他人の余計な慈悲に頼る必要はない」――北欧から生きやすい社会を実現するためのヒントを得てみるのはどうだろうか。

（トントゥ）

（一九六頁　本体二〇〇〇円　3月刊）

ユリイカ 2021年6月号
特集＝レイ・ハラカミ『unrest』『opa*q』『red curb』から『lust』、『暗やみの色』まで…没後10年
青土社

孤高の音楽家レイ・ハラカミがこの世を去って、早一〇年の月日が経とうとしている。ここ京都を拠点に活動した彼の、独創的な作品たち――いわゆる「テクノ系」でありながら、柔らかく温かい反響音に満ちた唯一無二のサウンド――は、今なお多くのファンを魅了してやまない。

雑誌『ユリイカ』の六月号は、そんなハラカミの没後一〇年を記念した特集号となった。彼との楽曲コラボレーションを行った矢野顕子や、彼から大きな影響を受けたというサカナクションの山口一郎など、かつての音楽仲間たちの証言によって、作品と人物の両面から、また新たなる「レイ・ハラカミ」像が浮かび上がってくる。本書はこの他、『unrest』などの彼の作品を読み解く解説はもちろんのこと、彼が制作に用いた機材に関する話題や、彼の独特のサウンドをピアノ譜に書き起こすという意欲的な試み、のみならず彼が高校時代に制作したという漫画作品までをも収録する、ファン垂涎の豪華な内容となっている。

思い返せば、評者がレイ・ハラカミという存在に出会ったのはまだ高校生の頃のことで、当時すでに、彼はもうこの世にいなかった。今こうして彼に関する論評やエッセイの数々に目を通すたび、彼がこの一〇年の間に生み出していたかもしれない作品の不在に思いを致す。そうして思いを致しては、あまりに遣る瀬ない気分に沈む。この世界は本当に、本当に惜しい才能を失ってしまった。本書を読み進めれば読み進めるほどに、その我々が失ったものの大きさを、改めて知る。

（八雲）

（三一九頁　本体一七〇〇円　5月刊）

ラーエル・ファルンハーゲン【新版】
ドイツ・ロマン派のあるユダヤ女性の伝記
ハンナ・アーレント著　大島かおり訳　みすず書房

「私の関心はただ、ラーエルの生涯の物語を、もし彼女自身が語ったとしたらこうであろうように私の言葉で語ることにあった」――本書は、ドイツ系ユダヤ人の思想家ハンナ・アーレントによる、あるユダヤ人女性ラーエル・ファルンハーゲンの伝記だ。

ラーエルは、啓蒙君主フリードリヒ二世の治世下にあるベルリンで、裕福なユダヤ人の家に長女として生まれた。だが、ユダヤ人女性に生まれついたというこの動かしがたい事実は、彼女を生涯苦しめ続けることとなる。アーレントは、ラーエルのこの実存的な苦しみと、それを乗り越えるまでの軌跡を描く。

自らのユダヤ性に恥辱を感じていた彼女は、改宗や結婚を通じてユダヤ性を抹消し、ドイツ社会に同化しようとする――「ユダヤ人なるものをわたしたちのなかから根こそぎにしなくてはなりません」。しかし、その試みは幾度となく破綻する。同化しようともがけばもがくほど、自分がユダヤ人女性というパーリアであることが自覚されるのだ。同化の不可能性と欺瞞性を悟った彼女は、最終的に、ユダヤ人たることを、意識的パーリアたることを選び取り、死の床でこう語る――「わたしの生涯のかくも長いあいだの最大の恥辱、もっとも苦い苦しみと不幸であったこと、ユダヤ女に生まれついたことを、いまのわたしはけっして手放したくありません」。

ユダヤ性や同化の問題を考えるうえで、本書を欠かすことはできない。アーレントの隠れた名著をこの機会にぜひ。　（ぱや）

（四九六頁　本体五五〇〇円　5月刊）

軍事理論の教科書
戦争のダイナミクスを学ぶ
ヤン・オングストローム、J・J・ウイデン著　北川敬三監訳　勁草書房

本書は、海外の大学において軍事学の教科書として定評のある *Contemporary Military Theory:The Dynamics of War*（Routledge,2014）の全訳本だ。教科書的ではあるが、最新の軍事学全体を学べる好著である。

これまで、日本語で読める軍事学の概説書は、防衛大学校防衛学研究会編『軍事学入門』しか存在しなかった。しかし、同書は刊行が一九九九年と古く、最近の軍事学の知見を反映できていなかった。これに対して、今回ご紹介する『軍事理論の教科書』の原書は二〇一四年と比較的新しく、近年の軍事学の議論を反映したものとなっている。

軍事学というと戦争を肯定するものと思われがちだが、戦争・軍事を理解し、内在的に批判するためにこそ、軍事学の知識は欠かせない。近年、米中戦争や、米海軍の太平洋における制海権を奪取するために中国人民解放軍海軍が軍事行動を起こす、などと喧伝されている。しかし、本書を読めば、この問題を、より冷静に考えられるだろう。例えば、本書第八章第七節「制海に抵抗する方法」では、制海権を握る国家に対して、海軍力の劣る国家が、いかに対抗しうるか、いくつかの戦略が紹介されている。これを米海軍と中国人民解放軍海軍にあてはめて考えれば、海軍力で米国に劣後する中国が、米国に戦争を自ら仕掛けることは考えにくいことがわかる。

軍事に興味がある方だけでなく、現在の世界的な軍拡を憂慮し、米軍との一体化がすすむ日本の安全保障政策に危機感を抱く方にもお薦めの一冊である。　（投稿・行人）

（三二〇頁　本体三〇〇〇円　1月刊）

勉強する気はなぜ起こらないのか

外山美樹著
ちくまプリマー新書

「勉強」に「やる気」はつきものだ。やる気がないのに勉強しなければならない、とはよくある悩みだろう。やる気を「出す」方法に焦点を当てるのもいいが、本書のようにやる気が「出ない」ことに目を向けるのもよいのではないだろうか、ということでやる気について考えてみよう。

たとえば勉強が手段になっているか目的になっているか、という分け方がよくある。一般的に目的になっていることが望ましいとされるが、本書では手段であることもまた肯定される。リターンがあるから勉強する、それでもいいのだ。また学習性無力感、いわゆる「何をしても無駄」という認識が作られてしまうとやる気が失われることが犬を使った実験で明らかになっている。しかしこれも追加実験で、無力感に陥った犬に対して苦境を抜け出す方法を学習させるとやる気が復活することもわかっている。そう、勉強しても無駄と思ったら、上手くいっている人にやり方を聞くのも一つの手だ。正攻法が使えなければ搦手から、やってみてほしい。（ねこ）

（一九二頁　本体八〇〇円　4月刊）

悲劇の世界遺産
ダークツーリズムから見た世界

井出明著　文春新書

「ダークツーリズム」、つまり「戦争や災害などの悲劇の記憶を巡る旅」。関連映画も多く撮られる程世界中で大ブームだが、日本では未だ広く知られていない。しかしこの国には、被爆や自然災害、公害など「悲劇の記憶」は多い。本書は、日本での「ダークツーリズム」の可能性を示す、「記憶」の旅の手引書だ。

本書の魅力は次の二点に存する。一点目は、著者の筆致のしなやかさだ。旅先として世界遺産に注目した彼は、実際に広島や島根を訪れた模様を紀行文のような軽妙さで綴る。他方、展示方法や記述内容に向ける視線は鋭い。日本の遺産には政治性が絡み、「負の歴史」の側面を隠していると喝破するその筆の切れ味には舌を巻く。二点目は、海外と比べながら、世界遺産となる潜在性を秘めた事物まで取り上げている点だ。特に、第二次大戦後に復興されたフランスの文化遺産都市と比較し、日本の陸前高田も「コンクリート」の遺産都市になり得ると論じる著者の考察は興味深い。

歴史は常に光と影を孕む。忘却されてきた「記憶」の旅のお供にぜひ本書を。（リンダ）

（二二〇頁　本体一一〇〇円　5月刊）

晩年のカント

中島義道著
講談社現代新書

標題にもあるとおり、本書はかの大哲学者が過ごした最後の一一年間を辿る。還暦後に手に入れたマイホームで、知人たちを招待して催された昼食会。規則正しく行なわれた日々の散歩。これら周知のエピソードの裏、その晩年は悠々自適の穏やかな日々というわけでもなかった。著書『たんなる理性の限界内における宗教』の内容をめぐって、プロイセンの官憲に目をつけられた筆禍事件。血気盛んな若者であったフィヒテとの出会いと対立。――やがて老衰で死に至るまで、カントはあくまで哲学者・カントでありつづけた。

特に後半部では、晩年の著作の数々から彼の哲学的な立場が抽出される。引用された『人間学』や『自然地理学』は、女性や人種に関わる偏見を含む（今でこそ物議を醸すような）ものであり、これは読む人を選ぶ内容かもしれない。とはいえそれは当時のことである。ここに描かれるカントと同じく老境に達した著者の、カント愛に満ちた眼差しと評価を含むコメントは、それだけをとっても本書の大きな読みどころとなっている。（八雲）

（二四〇頁　本体九〇〇円　1月刊）

放課後の教室。人生、あるいは読書について。

◇：ってかさ。ネトフリだってインスタだってあるし、本なんか読むヒマなくない？　みんなはなんで本読んでんの？

♤：オレはビジネスに役立つからだって思ってるけど。森ビルとかゴールドマンサックスとかで活躍してる堀内さんも、読書めっちゃ推してたし。だからオレは、読書は仕事のためだって思ってるよ。

◇：へえ～。どんな風に役に立つって言ってんの？

♤：『**読書大全**』（日経ＢＰ）では、「重大な経営判断や経営危機に直面し、人生の岐路に立たされたとき」に、読書が「一筋の光明になる」って言ってるよ。この本、何がすごいかって、骨太な本を二〇〇冊揃えて、それぞれ読みどころを教えてくれてるんだ。宗教・教育・経済のようにカテゴライズしてあるから、自分が読みたいジャンルから読んでもＯＫ。

♡：二〇〇冊もあるの!?　いいなって思った本とかあった？

♤：『**綴葉**』にも載ってたけど、ピーター・ティールの『ゼロ・トゥ・ワン』かな。彼がいかにビジネスを成功させたかについて書かれてるんだ。スタートアップを目指す人必見の本だね。

♡：う～ん。私は正直ビジネスとかはあんまりわからないなあ。だから、私は仕事のため、とか思わずに、ただ楽しいから本を読んでるよ。私も堀内さんの本と似てるけど、「本を紹介する本」を最近読んで、いいなって思ったかな。『**ドラゴン桜　超バカ読書**』（徳間書店）って本。私はあんまり難しい本は好きじゃないから、手軽にサクサク読める本を手に取っちゃって。

♤：え、いいじゃん！　手軽に読めるのって大事だよ！

♡：この本の良いところは、読みやすいけど読みにくいことかなあ。矛盾してるかもしれないけど。まず、マンガ『ドラゴン桜２』の挿絵が使われていて、マンガを読み進める感覚で本全体を読めるんだよね～。そこが結構気に入ってる。

◇：あーね。確かに読みやすそう。でも、読みにくいってのは？

♡：えっとね。紹介されてる本は、決して簡単な本ばかりじゃないの。マンガも紹介されてるけど、太宰とか、アリストテレスとか、いわゆる古典って言われるような作品も紹介されてて。だから、「わかった気」になるのは簡単だけど、「わかった」って言うのは簡単じゃないなあって。そこがまたこの本の魅力なんだけどね。

◇：「みんなのための本であり、誰のための本でもない」って感じ？　あたしは別に読書アンチってわけじゃないけど、ただ、読書をしただけで満足、ってのがダサいって思ってるってだけ。ショーペンハウアーだって言ってるもん。「読書は自分で考えることの代わりにしかならない」って。『**読書について**』（光文社古典新訳文庫）って本に書いてあったけど、マジそれなって感じだった。読書ってデメリットにもなるんだってこの本読んで気付かされたわ。この本って、パッと見では本をディスってるようにしか見えないけど、彼が本当に言いたいのは、「良書を読んだ上で、自分で考えろ」ってことなのかなってあたしは思ったよ。読んだ冊数を自慢してイキってるようなヤツにこそ読んで欲しいって感じの本。きっと新しい発見あるって思うわ。

♤：なるほどなあ。ってかもうこんな時間。これからどうする？

「本屋さん」「いこっか」

（出席点）

生きて傷つく、「傷」に生かされる。

「癒えない傷」などない……こんな言葉を信じられる人はほとんどいないだろう。それを忘れてしまえたらと強く願うような傷つきは、生きれば生きるほど積み重なっていく。果たして私たちは生きている限り、ただ傷つく事しかできないのだろうか。あるいは、傷つかないようにと、怯えながら生きていく事しかできないのだろうか。ここから、我々が「傷」と共にどう生きるべきかを考える。

個性化の糧としての傷つき

臨床心理士の秋田巌は、『人はなぜ傷つくのか　異形の自己と黒い聖痕』（講談社選書メチエ）の中で、「人の人たるゆえんは『傷』にある」と述べている。本書の中で彼は、人間が個性化（＝自己実現）を果たしていく上で必要不可欠な要素として「傷」を捉え、『ブラック・ジャック』を代表とする様々な娯楽作品の中に、「傷」が癒されぬまま、むしろその「傷」によって自分の人生を形作っていく、「異形の自己」という原型を見出した。確かに私たちは、良くも悪くも「傷」によって自分の人生の方向性を左右されている節がある。貧困家庭で苦しい思いをしてきたからこそ、公教育の改革に対して情熱を燃やす人や、女性差別に遭ってきたからこそ、フェミニズムの研究を強く進めようとする人……そういった「傷」があるからこその人生を生きようとしている人たちを、評者はこの大学でたくさん見てきた。秋田は「癒されぬ個性化」という言葉を用いて、個性化においては「傷」が個人の人生にとって積極的な意味があるということを指摘したのだ。しかし、本当に人間は、美しい成長物語かのごとく前向きに生きていけるのだろうか。

トラウマ体験からの成長に必要なもの

『トラウマ後　成長と回復　心の傷を超えるための六つのステップ』（筑摩選書・絶版）の中に登場する、社会心理学者ロニー・ジャノフ＝ブルマンの理論によれば、「世界は善意でできている」「世界には意味があり、コントロールや予測が可能で、公正である」「私たちは価値ある人間だ」といった三つの考え方が、欧米文化には深く根ざしていて、これは前提的世界の中核をなしているといいう。私たちは、トラウマに直面すると、世界に対するそういった前提と、トラウマに関連した新たな情報との対立を解こうとする。そして、著者であるスティーブン・ジョセフ曰く、トラウマ体験後の成長は、世界に対する前提を再構築することによって達成されるものであり、私たちは、大切にしてきた世界観を守ろうとする防衛的欲求と、新しい情報から学ぼうとする生物学的ニーズの間で激しく揺れることになる。このように、「傷」を負うことが即ち成長に結びつくわけではなく、その意味を問いながら、生きている世界への肯定的な前提を、作り直すことが必要となる。

私たちはこれからも、「傷」を負いながら生きていくだろう。しかし、忘れないでいたいのは、癒えないとしても無意味だとは限らないという事実だ。それらが私たちの生にもたらす意味……例えば、自己実現の糧、あるいは、新しい世界観獲得への契機といった意味を見出すことこそが、「傷」と共に生きる、そして「傷」によって生かされるということなのではないだろうか。

（ましゅ）

編集後記

「好きな食べ物は何？」と聞かれると、本当に困ってしまう。質問者が、「（食べるのが）好きな食べ物」を聞いているのだとしたら、そんなもの気候や体調によってころころ変わるから、その時々によって違うとしか言いようがない。

食べ物を好きになる理由は、本来めちゃくちゃ自由で広いと思う。食べるとお洒落な気持ちになれるからパフェが好き、という人だっているだろうし、作るのが楽しいからカレーという人もいるだろう。食べたことないけどなんか見た目が気になる、という理由で好きになってもいいし、料理に纏わる思い出を胸に秘めていたっていい。

それなのに！「好きな食べ物は何？」と聞いてくる無粋な誰かは、到底そんなことを考えちゃあいない。食べ物といえば食べるものという意識しかないのだ。この問題を100％理解してくれる人はなかなかいない……

おっと、来月号の予告を忘れるところでした。次号は『綴葉』の記念すべき400号目。『綴葉』の長い歴史に思いを馳せる特別な号になりそうです、お楽しみに！　（茫漠）

当てよう！ 図書カード

ハロワー！　めっちゃ梅雨が来たかと思いきや、もう今めちゃくちゃ晴れましたね。ということで、このクイズで、皆さんをぶち上げていこうかなと思います!!　昨年度開催されたラップバトルの日本大会「ULTIMATE MC BATTLE 2020」にて、京都代表として初優勝を果たしたラッパーさんは誰？

1. 蛇　　2. 早雲
3. JAKE　　4. 山本びんた

（ましゅ）

《応募方法》答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。ウェブサイト（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）からの応募も可能です。正解者の中から抽選で5名の方に図書カードを進呈いたします。応募の締め切り日は8月15日です。

4月号の解答

4月号の問題「世界で一番短い曲としてギネスに認定されている曲は何というメタル・バンドによって作曲されたでしょう？」の正解は、4. ナパーム・デスでした。この問題をきっかけにメタラーが増えると嬉しいです。図書カードの当選者は、クレルモンさん、ふくろうさん、生仏さん、スミレさん、パスカルさんです。おめでとうございます。（ぱや）

読者からひとこと

○『綴葉』を読むのは初めてだったのですが、もっと早くから読めばよかったと後悔しています。本を読むのは好きですが、ジャンルが偏っているので、『綴葉』であまりよまないタイプの本に出会えたらいいなと思いました。

（農学部・スミレ）

――本誌『綴葉』を読んでいただき、ありがとうございます！　私も本を読むのが好きなのですが、スミレさんと同じく、どうも読むジャンルが偏ってしまいます。ただ『綴葉』には、学術書や入門書、詩集や漫画など、様々なジャンルの本の書評が載っています。書評者の専門も、哲学、文学、心理学、政治学など、様々です。これからも本誌を通じて、出会えてよかったと思えるような本を読者の皆さまにご紹介できればと思います。

○短編シリーズの特集がおもしろかったです。短時間で読めるので、何冊か読んでみたいです。

（法科大学院・ふくろう）

――短編は、短時間で読めるという手軽さも魅力の一つですよね。最近、すきま時間があるとすぐにスマホを触ってしまうので、私もたまにはスマホの誘惑を断ち切って、短編の世界に浸ってみようと思います。　（ぱや）